

山味文庫  
松廊  
1

留規錄  
風言遺草

全

五十一

山本  
華堂  
藏  
書  
印

長門松陰吉田先生著

雷魂錄

同輯取素彦先生著

風塵遺草

全

松下邨塾藏

版

信龍

留魂錄

全

留魂錄

身ハタトト武藏ノ野邊ニ持又トモ留置ニレ  
大和魂

十月念五日

一余去年以來心蹟百變奉テ數ハ難レ就中趙ノ  
賞高ヲ布テ楚ノ屈平ヲ仰ク諸友人知ル所ナ  
事故ニ子速カ送別ノ句ニ燕趙多士一貫高荆  
楚系憂只屈平ト云モ此下ニ然ルニ五月十四  
日關東ノ行ヲ聞レ立リハ又一ノ誤ノ字ニ工

夫ヲ付タリ時ニ于遠死字ヲ贈ル余之ヲ用ヒ  
ヌ一白綿布ヲ求テ孟子至誠而不動者未之有  
也ノ一句ヲ書シテ巾ニ縫付携テ江戸ニ來リ  
是ヲ評定所ニ留メ置シモ吾志ヲ表スルニ去  
年來ノ事恐多クモ天朝幕府ノ間識意相  
孚セサル所アリ天苟モ吾區々ノ惘識ヲ諒シ  
玉ハ幕史ハ又吾説是トセント志ヲ立タレ  
臣蚊蟲負山ノ喻終ニ事ヲナスコト不能今日ニ  
至ル亦吾徳ノ菲薄ナルニヨレハ今將誰ヲカ

尤メ且怒シニヤ

一七月九日初テ評定所呼出アリ三奉行出坐尋  
鞠ノ件兩條ナリ一曰梅田源次郎長門下向ノ  
節面會ニタル由何ノ密議ヲカセレマ二曰御  
所内ニ落文アリ其手跡汝ニ似タリト源次郎  
其外申立ル覺アリマ此二條ノミ夫梅田ハ素  
ヨリ奸骨ナレハ余其志ヲ語テテ欲セサル所  
ナリ何ノ密議ヲカナサニヤ吾性光明正大ナ  
ルヲ好ム豈落文ナトノ隠味ノ事ヨナサニ

マ余是ニ於テ六年間幽囚中ノ苦心スル所ヲ  
陳シ終ニ太原公ノ西下ヲ請ヒ籍江侯ヲ要ス  
ル等ノ一ヲ自首ス籍江侯ノ事ニ因テ終ニ下  
獄トハナレリ

一吾性激烈怒罵ニ短シ務テ時勢ニ從ヒ人情ニ  
適スルヲ主トス是ヲ以テ吏ニ對シテ幕府遊  
勅ノ已ムヲ得ザルヲ陳シ然ル後當今的  
當ノ處置ニ及フ其說常ニ講究スル所ニシテ  
具ニ對策ニ載スルカ如シ是ヲ以幕吏ト雖甚

怒罵スルヲ不能直ニ曰汝陳白スル所悉ク的  
當氏思ハレズ且卑賤ノ身ニシテ國家ノ大事  
ヲ議スルヲ不届ナリ余亦深ク抗セズ是ヲ以  
テ罪ヲ得ルハ萬々辞セサル所也ト云テ已ミ  
又幕府ノ三尺布衣國ヲ憂ルヲ許サズ其是  
非吾曾テ辨争セサル所ナリ聞ク薩ノ日下部  
伊三次ハ吏ニ對シ當今政治ノ缺失ヲ歴誌シ  
テ如是ニテハ往先三五年ノ死事モ保テ難シ  
ト云テ鞠吏ヲ激怒セシメ乃曰是ヲ以死ヲ得

ト雖悔サルナリト是吾ノ及サル所ナリ子遠  
ノ死ヲ以テ吾ニ責ルモ亦此意ナルヘシ唐ノ  
段秀實郭曦ニ於テハ彼カ如ク誠惻未泯ニ於  
テハ激烈然ラハ則英雄自ラ時措ノ宜シキア  
リ要内省不疚ニアリ抑亦人ヲ知り機ヲ見ル  
ヲ尊フ吾ノ得失當ニ蓋棺ノ後ヲ待テ議ス  
ヘキノミ

一此回ノ口書甚草々ナリ七月九日一通申立タ  
リ後九月五日十月五日兩度ノ呼出モ差タル

鞠モナクメ十月十六日ニ至リ口書讀聞ケテ  
先直ニ書判セヨトノリ之余カ苦心セシ墨使  
應接航海雄略等ノ論一モ書載セス唯數ヶ所  
開港之事ヲ程克演テ國力充實ノ後御打攘可  
然大ト吾心ニモ非サル迂腐ノ論ヲ書付口書  
トス余言テ益ナキヲ知故ニ敢テ云ハス不滿  
ノ甚シキニ甲寅ノ歲航海一條ノ口書ニ比ス  
ルトキハ雲泥ノ違ト云ハシ

一七月九日一通大原公ノ了籍江表要屬ノ了

等申立タリ初意ヲク是等ノ一幕ニモ已ニ謀  
知スヘケレハ明白ニ申立タル方却テ宜シキ  
ニト已ニシテ逐一口ヲ開キシニ幕ニテ一回  
知ナルニ似タリ因テ又意ヲク幕ニテ知ラヌ  
一ヲ強テ申立テ多人數ニ株連蔓延セハ善類  
ヲ傷フ一少ナカラスモテ吹テ疵ヲ求ムル  
齊シト是ニ於テ鯖江侯要撃ノ一モ要諫ト  
云替タリ京師往來諸友ノ姓名連判諸士ノ姓  
名等可成丈ハ隠シテ具白セス是吾後起人ノ

為ニスル區々ノ婆心ニ而シテ幕裁果シテ吾  
一人ヲ罰シテ一人モ他ニ連及ナキハ實ニ大  
慶ト云ヘシ同志ノ諸友深考思セヨ  
一要諫一條ニ付事不違トキハ鯖江侯ト刺違テ  
死ニ警衛ノ者要蔽スルトキハ切拂ヘキトノ  
一實ニ吾云サル所ナリ然ルニ三奉行強テ書  
載テ誣服セシメント欲ス誣服ハ吾肯テ受ン  
ヤ是ヲ以テ十六日書判ノ席ニ臨テ石谷池田  
ト兩奉行ト大ニ争辨ス吾肯テ一死ヲ惜メン

マ両奉行ノ權詐ニ服セサルニ是ヨリ先九月  
五日十月五日兩度ノ吟味ニ吟味役マテ具ニ  
申立ルニ死ヲ決シテ要諫スハ必シモ刺違切  
拂等ノ策アルニ非ス吟味役具ニ是ヲ諾シテ  
而モ且口書ニ書載スルハ權詐ニ非マ然レ事  
已ニ妾ニ至レハ刺違切拂ノ兩事ヲ受サルハ  
却テ激烈ヲ欠キ同志ノ諸友モ亦惜ムナルヘ  
シ吾ト雖亦惜マサルニ非ス然レ臣反復思ヘ  
ハ成仁ノ一死區々ノ夫ニ非ス今日義卿奸權

ノ為ニ死ス天地神明照鑑上ニアリ何惜ムヘ  
キ丁カアラシ  
一吾此回初メ素ヨリ生ヲ謀ラス又死ヲ必セス  
唯誠ノ通塞ヲ以天命ノ自然ニ委シタルナリ  
七月九日ニ至リテハ略一死ヲ期ス故ニ其詩  
ニ云繼盛唯當廿市戮倉公寧復望生還其後九  
月五日十月五日吟味ノ寛容尤ニ歎カレ又八夕生ヲ  
期ス亦頗ル慶幸ノ心アリ此心吾此身ヲ惜ム  
為ニ發スルニ非ス抑故マリ去臘大晦朝儀已



ニ幕府ニ貸ス今春三月五日我公ノ駕已ニ萩  
府ヲ發ス吾策是ニ於テ尽果タレハ死ヲ求ム  
ル下種テ急ナリ六月ノ末江戸ニ來ルニ及シ  
テ夷人ノ情態ヲ見聞シ七月九日獄ニ來リ天  
下ノ形勢ヲ考察シ神國ノ事猶ナスヘキモノ  
アルヲ悟テ初テ生ヲ幸トスルノ念勃々タリ  
吾若死セスニハ勃々タルモノ決シテ泪没セ  
サルニ然レ氏十六日ノ口書三奉行ノ權詐吾  
ヲ死地ニ措シトスルヲ知テヨリ更ニ生ヲ幸

テ心ナシ是亦平生學問ノ得カ然スルニ  
一今日死ヲ決スルノ安心ハ四時循環ニ於テ得  
ル所アリ蓋シ彼ノ未稼ヲ見ルニ春種ニ夏苗  
ニ秋蒔冬藏ス秋冬至レハ人皆其歲功ノ成ル  
ヲ悦曾テ西成ニ臨テ歲功ノ終ルヲ哀シムモ  
ナラ聞カス吾行年三十一事成ル下ナク死シ  
テ未稼ノ未秀テ又貴ヲサレニ似タレハ惜ム  
大キニ似タリ然レ義卿ノ身ヲ以テ云ヘハ是  
亦秀實ノ時ナリ何ヲ必シモ哀マン何トナレ

ハ人壽ハ定リナク木稼ノ必ス四時ヲ經ル如  
キニ非ス十歳ニシテ死ス者八十歳中自ラ四時  
アリ二十八自ラ二十ノ四時アリ三十八自ラ  
三十ノ四時アリ五十百ハ自ラ五十百ノ四時  
アリ十歳ヲ以テ短トスルハ蟋蟀ヲシテ靈椿  
タラシメント欲スルナリ百歳ヲ以テ長トス  
ルハ靈椿ヲシテ蟋蟀ヲラシメント欲スルナ  
ルハ齊シク命ニ違セストハ義郷三十四時已備  
亦亦實其批タルト其粟タルト吾カ知所ニ

非ス若同志ノ士其微衰ヲ憐レミ繼紹ノ人ア  
ラハ乃後來ノ種子未タ絶ヘス自ラ木稼ノ有  
年ニ耻サルナリ同志其是ヲ考思セヨ

一東口揚屋ニ居水戸ノ士堀江克之助余未タ一  
面ナシト雖真ニ知己ナリ真ニ益友ナリ余ニ  
謂テ曰昔ニ矢部駿州ハ桑名侯へ御預ノ日ヨ  
リ絶食ニテ敵讐ヲ誣テ死シ果シテ敵讐ヲ退  
ケタリ今足下モ自ラ一死ヲ期スルカラハ祈  
念ヲ施テ内外ノ敵ヲ拂ハレヨ一心ヲ殘シ置

テ玉ハレヨト下寧ニ告戒セリ吾誠ニ此言ヲ  
感服ス又鮎澤伊太夫ハ水藩ノ士ニシテ堀江  
ト同居ス余ニ告テ曰今足下ノ御沙汰モ未タ  
測ラレス小子ハ海外ニ赴ケハ天下ノ事惣テ  
天命ニ附センノミ但シ天下ノ益ト成ヘキ  
ハ同志ニ託シ後輩ニ殘シ置度ナリト此言  
大ニ吾志ヲ得タリ吾ノ祈念ヲ籠ル所ハ同志  
ノ士甲斐々々シク吾志ヲ繼紹シテ尊攘ノ大  
功ヲ建ヨカシナリ吾死ス尺堀鮎二子ノ如キ

ハ海外ニ在トモ獄中ニ在トモ吾同志タラン  
者願クハ交ヲ結ヘカシ又本所龜沢町ニ山  
口三輔ト云醫者アリ義ヲ好ム人トシヘテ堀  
鮎二子ノ事ナト外聞ニ在テ周旋セリ尤モ及  
ブヘカラサルハ未タ一面モナキ小林民部ノ  
事ニ子ヨリ申遣ハシタレハ小林ノ為ニモ亦  
大ニ周旋セリ此人想フニ不凡ナラン且三子  
ヘノ通路ハ此三輔老ニ托スヘシ  
一堀江常ニ神道ヲ崇メ天皇ヲ尊セ大道ヲ天下

ニ明白ニシ異端邪說ヲ排セント欲ス謂ラク  
天朝ヨリ教書ヲ開版シテ天下ニ頒示スルニ  
如スト余謂ラク教書ヲ開版スルニ一策ナカ  
ルヘカラス京師ニ於テ大學校ヲ興シ上  
天朝ノ御學風ヲ天下ニ示シ天下奇材異能ヲ  
京師ニ貢シ然ル後天下古今ノ正論確議ヲ輯  
集メ書トナシ 天朝御教書ノ餘ヲ天下ニ  
分ツトキハ天下ノ人心自ラ一定スヘシト因  
テ平生子遠ト密スル所ノ尊攘堂ノ議ト合セ

堀江ニ謀リ是ヲ子遠ニ任スル丁ニ決ス子遠  
モシ同士ト内外志ヲ協ヘ此事ヲシテ少レク  
端緒ヲラシメハ吾志トスル所モ亦荒セスト  
云ヘレ去舟初渡論者等ノ丁一跌ニト雖尊皇  
攘夷尚モ已ハヘキニ非レハ又善術ヲ設ケ前  
緒ヲ繼紹セスンハアルヘカラス京師學校ノ  
論亦奇ナラスヤ  
一小林民部云京師ノ學習院ハ定日アリテ百姓  
町人ニ至ルマテ出席シテ講釈ヲ聽聞スル丁

ヲ許サル講日ニハ公卿方出座ニテ講師管家  
清家及之地下ノ儒者相混スルナリ然ラハ此  
基ニ因テ更ニ斟酌ヲ加ヘハ幾等モ妙策アル  
ヘシ又懷徳堂ニハ靈元上皇宸筆勅額アリ此  
基ニ因リ更ニ一堂ヲ興スモ亦妙ナリト小林  
云ヘリ小林ハ鷹司家ノ諸大夫ニテ此度遠島  
ノ罪科ニ處セラル京師諸人中罪責極テ重シ  
其人多材多藝唯文字ニ深カラスオアル人ト  
見エ西奥揚屋ニテ同居後東口ニ移ル京師ニ

テ吉田ノ鈴鹿石州同筑州別テ知己ノ由亦山  
口三輔モ小林ノ為ニ大ニ周旋シタレハ鈴鹿  
山口カ寺ヲ以テ海外進モ吾同志ノ士通信ヲ  
ナスヘシ京師ノ事ニ就テハ後來必カヲ得ル  
所アラシキ事ニ思フ所ニ及テハ其ノ事ヲ  
讀ム高松ノ藩士長谷川宗右衛門年來主君ヲ  
諫メ宗藩水家ト親睦ノリニ付テ苦心セシ人  
ナリ東奥揚屋ニアリ其子連水余ト西奥ニ同  
居ス其父子ノ罪科何未タ知ヘカラス同志ノ

諸友切ニ記念セヨ予始テ長谷川翁ヲ一見セ  
シ時獄吏左右ニ林立ス法隻語ヲ交ユルヲ  
得ス翁獨語スル者人如クシテ曰寧爲玉碎勿  
爲瓦全ト吾甚其意ニ感入同志其之ヲ察セヨ  
一右數條余緩ニ書スルニ非ス天下ノ事ヲ成ス  
ハ天下有志ノ士ト志ヲ通スルニ非レハ得ス  
而シテ右數人余此回斯ニ得ル所ノ人ナルヲ  
以テ之ヲ同志ニ告示スニ又勝野ノ父豊作今  
潜伏スト雖有志ノ士ト聞ケリ他日事平ラク

ルトヲ待テ物色スヘシ今日ノト同志ノ諸士  
戰敗ノ餘傷殘ノ同士ヲ問訊スル如クスヘシ  
一敗乃挫折スル豈勇士ノ事ナランヤ切囑々  
一越前ノ橋本左内二十六歳ニシテ誅セラル實  
ニ十月十七日也左内東奥ニ坐スル五六日ノ  
ミ勝保氏ト同居セリ後勝保西奥ニ來リ予ト  
同居ス余勝保ノ談ヲ聞テ益左内ト半面ナキ  
ノ嘆ス左内幽囚居中資治通鑑ヲ読ミ注ヲ作

リ漢紀ヲ終ル又獄中教學工作等ノ一ヲ論セ  
シ由勝保予カ為ニ語ルニ大ニ吾意ヲ得タリ  
予益左内ヲ起シテ一議ヲ發セン一ヲ思フ嗟  
夫

一清狂ノ護國論及ヒ吟稿口羽氏ノ詩文稿天下  
有志ノ士ニ寄示レタシ故ニ余是ヲ水人鮎沢  
伊太夫ニ贈ル一ヲ許ス同士其吾ニ代リテ此  
言ヲ踐ハ幸甚也

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 予, 夫, 一, 清, 狂, 護, 國, 論, 及, 吟, 稿, 口, 羽, 氏, 詩, 文, 稿, 天, 下, 有, 志, 之, 士, 寄, 示, 之, 故, 余, 是, 之, 水, 人, 鮎, 沢, 伊, 太, 夫, 贈, 之, 一, 許, 之, 同, 士, 其, 吾, 代, 之, 此, 言, 之, 踐, 幸, 甚, 也.)

カキツケ終テ後

心アルコトノ種々カキ置ヌ思ヒ歿セルコトナカリケリ

呼タシノ聲マツ外ニ今ノ世ニ待ヘキコトノ無リケルカナ

討レタル吾ヲアハレト見シ人ハ君ヲ崇メテ夷拂ヘヨ

愚ナル吾ヲモ友トメツ人ハワガ友トノヲヨ人々

七夕ヒモ生カヘリツ、夷等ヲ拂ハンコ、口吾  
志レノヤ

十月廿六日黄昏書

二十一回 猛士



平生之學問淺薄ニシテ至誠天地ヲ感格スル  
出來不申非常ノ變ニ立至リ申候嘸々御愁傷モ  
可被遊拜察仕候

親思フ心ニマサル親心今日ノ音ツレ何トキ  
クラシ

乍去去年十一月六日差上候書得ト御覽被遊候  
ハ、左近所愁傷ニモ及不申ト奉存候尚又當五  
月出立之節心事一々申上置候事ニ付今更何モ

思殘候事無御座候此度漢文ニテ相認候語諸友  
書モ御轉覽可被遊幕府正議ハ九ニ御取用無之  
夷狄ハ縱橫自在ニ御府内ヲ致跋扈候へ共  
神國末地ニ墜不申上ニ

聖天子アリ下ニ忠魂義魄光々致候へハ天下之  
事モ餘リ御力御慈無之様奉願候随分御氣分御  
大切ニ被遊御長壽ヲ御保可被成候以上

十月廿日認置

家大人膝下

王大人膝下

家大兄坐下

寅次郎百拜

*[Faint, mostly illegible handwritten text in the upper right section of the page.]*

西北堂搦随方御気体御祇専一ニ奉存候私被誅  
候共首ニテモ葬具候人アリハ未天下之人ニハ  
棄ラレ不申ト御一以奉願候児玉小田村久坂之  
三妹ハ五月中置候事忌レ又搦御申聞奉願候吳  
兵モ人ヲ哀シヨリハ自ラ勤ムル丁肝要ニ御座  
候○私首ハ江戸ニ葬具家祭ニハ私平生用候硯  
ト去年十一月六日呈上仕候書トテ神主ト被成  
候搦奉願候硯ハ己酉ノ七月カ赤馬關廻浦之節  
買得セシ也十年餘著連テ勤クセル功臣也

松陰二十一回猛士トノ御記奉頼候

上封 =

小田村伊之助掾

久保 清太郎掾

久坂 玄瑞掾

二十七回生

風箏遺草叙

自國家勅王之車興。藩士之舍生殉義者。不知其幾何焉。蓋雖出於名節之盛。未嘗不由。吾公精忠之孚於上下也。夫十一士之死。寃與否。姑置之。其臨刑從容不迫。談笑而受刀者。雖古烈丈夫。何以尚之。獄卒之無狀。語及之則淚下矣。而奸吏俗子。或不察之。謬為之說曰。臨死有失節者焉。嗚呼。不成人之美。可謂以善矣。余下獄。問同囚得以觀其絕命之詩歌。尤想見其從容就死之狀也。然獄中之事。屢禁漏洩。余





本史乃... 治甲... 括牛... 或... 頃... 著... とき... 移... け

絶命辞

天地正氣有人而存

竹内勝愛稱正兵衛為久沈毅忠壯有武人之風  
歷代官及藏元役京師之變以內用在大坂城與  
完戸中村諸人同心戮力周旋至矣死時年四十  
二  
以上四名以甲子十一月十二日就死

辞世

毛利基

白の... 代をわく... 我身... 苦... 不... じ... ち  
持... せ... ぬ... 士... 乃... ち... 一... 不... 入... 基... 基... 一... ち

毛利基稱登人為入重厚歷小姓役遷世子畚頭  
進為直目附藩制直目附之職非家督人則不得  
任焉而以嫡子任之者以登人為始蓋以其撰別  
無人也平日無他嗜好愛書画與人接無騎甲死  
時年四十二

辞世

大和真判

大和真利攝國之助初擢江戸留守居既而慨然  
辭職從事於航海惡夷狄之害欲火捕濱夷館事  
發覺而已矣後遷世子番頭轉直目附死時年三  
十

臨刑而賦似後之君子 前田利濟

一死如鉛豈敢辭居官半世值清時  
酬君心事何須辯只有青天白日知

前田利濟字致遠號陸山稱孫右衛門變方客眾  
尤老於吏事戊午之秋吉田寅次以恭讓下獄政  
府諸人以嫌疑為懼而利濟獨為寅次周施大勉  
矣暨兩府平元轉直目附最後為加判相護殺死  
時年四十七

辭世 渡邊 暢

人間行路盡風波一死報君豈有他  
其吏不知賈生志流涕奈此國家何

渡邊暢稱內藏太為小姓役。橫濱燒館之舉。內藏太亦與焉。轉政務座。履事明快。有老吏之風。死時年二十九。

辭世

猶崎清義

日出之邦事義方。不飢不凍。送星霜。今宵一死。剛明聖。二十八年更覺長。

猶崎清義稱跡八郎。號節庵。學術純正。專心於義理。游江戸。入大橋順藏之門。尊讓之義。有大所發明。擢政務座。死時年二十八。

辭世

山田憲之

山田憲之。稱亦介。號雙山。初為小姓役。後補密用。局祐筆。性質明敏。博孫衆技。精於兵學。為手當方頭人。死時年五十六。

又

松島久誠

松島久誠。字有文。號辨峯。稱剛藏。初業醫。修洋學。





尤精於航海術。癸亥馬關之戰。剛藏為船將。以功  
列於騎隊。主管海軍局。為人疎放。不復事繩墨。死  
時年四十。

以上七名。以甲子十二月十九日就死。

附今樣 諸忠魂の公以 完戶真微

今からまともな人も少く本お終。云々名とお終の事  
り習り 俗奸吏忠魂となりてかゝる事せ

元治紀元甲子十二月廿九日撰於野山獄南房  
第二舎時屬窮陰天日慘澹覺悲風起筆端也

官言

明治元戊辰年十月新鑄

大坂心齋橋唐物町

河内屋吉兵衛

弘通

京都三條通寺町西

吉野屋甚助

書肆

同四條通御旅町

田中屋治兵衛



